
ポール・オースター(1947~2024)『闇の中の男』新潮文庫 2022 年

1.物語についての物語

●物語の主人公が物語の作者を亡き者にする

本作の主人公オーガスト・ブリル¹は作家で、ブリルが描いた物語が入れ子になって進んでいくという構造を持っている。特徴的なのは、ブリルが描いた物語の主人公オーエン・ブリック²が成し遂げるよう強いられている仕事³が、この物語の作者である主人公オーガスト・ブリルを殺害するという点で、これが本作全体の2/3のエピソードにあたる。

奴はこの世界を一から創ったわけじゃない。戦争を創っただけだ。そして奴は君のことも創ったんだよ、ブリック。わからないのか？これは君の物語なんだよ、我々のじゃない。この老人は、自分を殺させるために君を創り出したんだ。 / 今度は自殺だって話か。 / 間接的にはそういうことだ。(p.279)

●オーエン・ブリックの物語

オーガスト・ブリルが紡ぐ、オーエン・ブリックが迷い込んだ地の物語は“アメリカ同時多発テロ事件”を経験していないアメリカだった。「つまりこのアメリカ、このもうひとつの、9/11もイラク戦争も経験していないアメリカも、その歴史は彼が知っているアメリカとしっかりつながっているということだ。問題は二つの物語はどの地点で分岐しはじめたのか？(p.251)」

本作の後半、残り1/3で明らかにされるように、ブリルはままならない人生に大いに傷つき、物語は、過酷な現実からの逃避先であった。

物語から離れるな。それが唯一の解決策だ。物語から離れず、終わりまで行ったらどうなるか見てみるのだ。(p.214)

私は自分の物語が欲しい。いま欲しいのはそれだけだ。幽霊たちを遠ざけておくためのささやかな物語。(p.248)

ブリルは毎晩、闇の中で目覚めたまま、過去を考えまいとして、別の世界をめぐる物語を捏造するんだ。(p.280)

が、興味深いのは、その逃避先の物語を紡いでおきながら、その物語の主人公ブリックには、この虚構の物語を破壊するように、作者であるブリル自ら使命を与えている点。そして、そのうえで、にもかかわらず作者ブリルは、あっけなく虚構の物語をブリックの死をもって潰してしまう。

そう終わるしかないのか？イエス、おそらくイエス、これほど残酷でない結末を考えること

は難しくないが。でも何の意味がある？私の今夜のテーマは戦争だ。戦争がこの家に入ってきたいま、衝撃を和らげたりしたらタイタスとカーチャへの侮辱だと思う。(p.243)

作者**ブリル**の現実からの逃避先として作られていた物語が、必ずしも逃避先としてだけではなく、別の働きを担わされるように読むことができる。2点。

①主人公**ブリック**は、「そう都合のよい物語(=逃避先)にはなりませんよ、そうは問屋が卸しませんよ」という物語自身の自己検閲として機能している。あらかじめ物語に、当の物語自身にとって不都合な要素を織りこんでいて、心の準備をしておく、不測の事態に備えておく、不安を飼いならしておく、そのような機能として**ブリック**が登場している。

②同時に、**ブリック**を潰してしまったことで、虚構の物語を完遂したかというそうではない。むしろ**ブリック**と自分自身(**ブリル**)を重ねて、戦争によって(**ブリック**が)元の世界に戻れなかったことを、そのまま受け止めようとしている。「戦争がこの家に入ってきたいま、衝撃を和らげたりしたらタイタスとカーチャへの侮辱だと思う。」

現実からの逃避先としての物語が、過酷な現実を受け止めるための、緩衝材になっている。つまり、現実を否認するのではなく、現実を受け取るための物語になっている。

●心を匿い、庇護する物語

作品の残り1/3で明かされるのは、あまりに苛酷な現実の出来事だった。“闇の中の男”は作家自身のことであると同時に、孫のボーイフレンドのタイタスのことでもあった。現実からの逃避として非難するには、あまりにも酷い、受け入れがたい現実があり、ゆえに、**ブリル**は物語を必要としたのだ。

ブリルの姉ベティと、その夫ギルについてのエピソードで、ベティの死を**ブリル**は次のようにいう。「ベティは心が破れて死んだのだ。この言い方を聞くと笑う人もいる。でもそれは、世界について何も知らないからだ。人は本当に、心が破れて死ぬのだ。(p.300)」

すなわち、心が破れないように、作家は物語を紡ぎ、心を匿い、庇護している。

2.近代における物語論として

●物語とは何か

岩波書店『現代哲学の冒険⑧物語』所収の「物語行為論序説」で野家啓一は次のように書いている。

人間が「物語る動物」であるということは、それが無慈悲な時間の流れを「物語る」ことによってせき止め、記憶と歴史(共同体の記憶)の厚みの中で解体する自己に拮抗するためにこそ、われわれは多種多様な経験を記憶にとどめ、それらを時間空間的に整序することによってさまざまな物語を紡ぎ出すのである。(中略)

しかしながら、現代においては、人間の「物語る」能力は著しく衰退しているように見える。か

つては寝物語に枕辺で子供たちに「語り」聞かせるものであった昔話やお伽噺も、今では豪華な絵本を前に「読み」聞かせるものとなっている。炉端で自己の来歴と経験を虚実をとりまぜながら物語ってきた老人たちは、すでに核家族の中にはその居場所をもたない。語り伝えられるべき経験は、今日では実用的な「情報」と化して書棚やフロッピー・ディスクの中に納まっている。現代における「物語る欲望」は、あたかもゴシップ・ジャーナリズムの占有物であるかのようである。(p.5)

(はからずも、前々回の三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』のキーワード「情報」や、山極寿一『老いの思考法』で問われた「老人たち」のキーワードがつながってしまうのが興味深い)つまり、人は物語によってこそ、生を営んできたという指摘である。

前回のレジメで参照している渡辺京二『逝きし世の面影』をふまえれば、近代以前までは、人と自然が紡ぎだす、自生の豊かな物語が育まれていたのだろうと、ロマン主義者の私は想像する。

しかし、近代以降、それは喪われた。

ゆえに近代以降、自らの物語を、人工的に調達しなければならなくなった、近代以降の小説にはそのような役回りを担う側面があったのではないか。しかし、現代の物語は極めて頼りなげだ。物語に救済を求めても、現実逃避だと蔑まれ、逆に現実逃避ですと開き直って分を弁えれば小さな場所に閉じ籠る他ない。苛酷な現実の前でたじろぎ、汲々としている物語。

●感想

解説に書かれていたが、文庫本に収められている『闇の中の男』と、『写字室の旅』は、ふたつでひとつの作品だという。私は初め、課題の『闇の中の男』を読んだが、そのあとこの解説の指摘部分を読み、『写字室の旅』を読むことにした。『写字室の旅』も作家の話であり、ここでも物語を紡ぐことのうしろめたさのようなものを感じた。

今回は、現代のアメリカを代表する作家の作品に、物語の可能性を探る試みをみるような思いだった。

このけったいな世界が転がっていくなか。(p.427)

本作はこの印象的なフレーズで閉じられる。ここには諦念めいた含みと、最後の居直りといった態度を見い出すが、首尾よく行き過ぎているような違和も感じる。

この違和は何か。この息苦しさは何か。